論文の内容の要旨

論文題目　〈わたしたち〉でいることの困難と技法
現代日本におけるゲイ男性のつながりの社会学的考察

森山至貴

本論文は、現代日本におけるゲイ男性の集団がどのような困難を個々のゲイ男性に課しており、その環境の中を個々のゲイ男性がどのような技法を用いて生き、集合性を維持しているかを明らかにするものである。

近年、社会的弱者やマイノリティの共同性が、当の成員に対して発動させる「圧力」が前景化されるようになってきている。そしてこの現実は、マイノリティの抱える問題はマジョリティからの差別やマジョリティとマイノリティの不平等な関係に還元できる、とする差別論の構図では描けないものである。現代日本におけるゲイ男性の集合性が個々のゲイ男性に課す「圧力」もまたこのようなものである。この「圧力」、裏返せばゲイ男性のゲイ男性の集合性に対する「ついていけなさ」が現代のゲイ男性の集合性内のどのような社会的条件のもとに発生し、それがいかに回避されようとしているかを探るため、序章ではこの問題意識を社会学、当事者性といったトピックとの関連で詳述する。その上で、本論文におけるゲイ男性同士の関係性をつながりという言葉で表し、本論文の戦略的拠点とすることを述べる。

第一部ではゲイ男性に特有のつながりの現代的特徴を描き、現代のゲイ男性の集団が解くべきある問題の現代的な解けなさがこの「圧力」の条件であるとの仮説を提示する。まず 1 章では、男性同性愛者という概念とそれで表される存在が誕生した 1920 年代ごろから現在までのつながりの様態を大まかに追うことで、ゲイ男性のつながりが、どのように発

生し、どのように変化してきたかを追う。1920 年代以降、性的アイデンティティを内面に埋め込まれた男性同性愛者（≒ゲイ男性）は特定の、同性との性的接触を求めるアイデンティティの所有者とのつながり＝特権的な他者とのつながりと、このアイデンティティを持つ者全体の（可能的な）つながり＝総体的なつながりを希求してきた。しかし、これらの二種類のつながり双方を可能にしていたテクノロジーは、時代を下るに連れてそれぞれを可能にするものに純化し、分化している。したがって現在のゲイ男性は、ゲイ男性同士のつながりを、特権的な他者との／総体的なものという、明確に分かれた二種類として生きざるを得ない状況におかれている。

他のマイノリティ集団には存在せずゲイ男性に特徴的なこの特権的な他者とのつながりについて、2 章で論じた。異性愛者の場合、婚姻制度などによって承認される形で、特権的な他者とのつながりは「全体社会」の「例外事態」として人々に認識されている。しかし現在のゲイ男性のつながりの場合、そもそも総体的なつながりと特権的な他者とのつながりは分離しており、したがって両者の間に安定的な関係性が保持できていない可能性がある。この時、一方のつながりを求めるゲイ男性にとって、他方のつながりが発生させる文化や様式の過剰さは「ついていけなさ」を感じる原因となる。二種類のつながりの関係性の設定の難しさこそ、「ついていけなさ」を発生させる現代的要因なのである。

二種類のつながりの分離についてさらに跡づけ、また既存のゲイ男性の集合性をめぐる言論と本論文の異同を明らかにするために、3 章では、1990 年代中盤以降の日本におけるゲイコミュニティという言葉の使われ方を調べた。ゲイコミュニティという言葉の理想主義的含意は、ともするとゲイ男性がそのつながりに対して感じる「ついていけなさ」を忘却させる可能性があり、同時に特権的な他者とのつながりを排除する可能性が大きいことが明らかになった。この意味で、ゲイコミュニティとは本論文が考察したい対象＝ゲイ男性特有の「ついていけなさ」を指し示さないがゆえに、ゲイ男性のつながりの同義語としては使えない。そして裏を返せば、二種類のつながりの分化と一方の重視こそ、現代日本のゲイ男性において「ついていけなさ」や「息苦しさ」が発生する構造的条件である可能性が明らかになった。

第二部では、二種類のつながりの間の安定的な関係性の現代的な成り立ち得なさを明らかにし、ゲイ男性のつながりをめぐる現在の隘路を描き出す。4 章ではゲイ男性のアイデンティティ、5 章ではゲイ男性のライフスタイルを戦略的拠点に、この成り立ち得なさを跡づける。

4 章では 1990 年代以降にカミングアウトについて書かれた文章をとりあげ検討する。二種類のつながりの間に安定的な関係性が成立するには、そもそも個々のゲイ男性が 1 章で挙げた 2 種類のつながりに安定的にアクセスできている必要がある。しかし、カミングアウトという言葉の現在の用いられ方からわかるのは、個々のゲイ男性は、総体的なつながりへのアクセスのみが争点化される中で生を営んでおり、総体的なつながりを通じて特権的な他者とのつながりへとアクセスすることが想定されていないという事態である。このような、2 種類のつながりに関する言論の構図上の不全が、第一部で挙げた問いを解けなくさせていること、それゆえ「ついていけなさ」が言論の構図上発生せざるを得ないことが明らかになる。

5 章では「ゲイライフ」といううたい文句を掲げているゲイ雑誌『Badi』（2005 年 9 月号〜2007 年 10 月号）を分析の素材とし、ゲイ男性が共有するとされるライフスタイル像について検討した。『Badi』は本論文と同じ「ついていけなさ」という問いを引き受けているとみなすことができるが、その「解法」は事態を世代論に回収することによって弱毒化するものである。また、そもそもこの記事に描かれている事態は、個々のゲイ男性の総体的なつながりへの接続自体が安定的に成立しておらず、2 種類のつながりの関係の成立という解かれるべき問いを問いとして析出させることすら出来ていない状況を示している。したがって、隘路は完全な隘路として明示化され、第一部で挙げた問いの現代的な解けなさが完全に指摘されることとなる。

第三部では、第二部で論じたような隘路、すなわち多層化したつながりにおける共有の規範を解除し、「ついていけなさ」を回避するために呼び出される相互行為上の技法について論じる。ゲイ男性のつながりは現在総体的なつながりと特権的な他者とのつながりに分離しているので、前者についての技法を 6 章で、後者についての技法を 7 章で論じる。

6 章では、「こっち」という直示的な呼称についてのゲイ・バイセクシュアル男性へのインタビューの結果を分析する。ゲイ男性（とバイセクシュアル男性）の集団を指す「こっち」という「婉曲的」な呼び名は、「こっち」が何かにわざわざ言及せずとも、「こっちにいるからこっち」というトートロジーによって発し手と聞き手が同じ「仲間」であるとみなされることを可能にする。したがって、「仲間意識」を強く志向するこの語彙を用いることによって「仲間意識」を発生させることも可能である。曖昧さをもったトートロジカルな「こっち」という言葉の内実の空虚さは、ゲイ男性の間に規範的にならない形で共同性を立ち上げる、すなわち総体的なつながりの成立し得なさを組み込んで総体的なつながりを最低限維持しようとする、複雑な実践を可能にしている。

7 章では、ゲイ男性の間での言語実践としてのタチ／ネコという用語系を取り上げる。この用語は 2 章で述べた特権的な他者とのつながりにかかわる要素のうち、おそらくもっとも全域的に共有を想定されているものである。ゲイ男性の人々のタチ／ネコというこの曖昧な用語の利用は、特定の行為を人に結びつける 3 つの様式（「中立的に」／欲求を媒介に／能力を媒介に）の混在に整理できる。そして、この 3 つの様式の混在は、ゲイ男性が自らの欲求と相手の欲求を折り合わせながら、自らにとっての特権的な他者を上首尾に選別し関係を築いていくことを可能にする。この用語系においては、「他の人でなくその人を選びたい」という欲求の位置価が格下げされ、特権的な他者とのつながりの持つ排他性がある程度解除され、その成立可能性が高まる。同時に、それでも生まれる共有規範を、所詮異性愛男女の様式であるから従う必要がない、というレトリックで解除することができるようにもなっている。

終章では本論文全体の議論について要約し、本論文のインプリケーションを述べた。現代のゲイ男性は、その集合性が発生させる「ついていけなさ」という問題を生きなければならない。本論文は、その困難の要因を正確に同定し、その上で現在の困難を食い破る技法を現在の中に見て取った。ただし、「個人と社会の対立」を安易に解消してしまわないよ

う、それでも残りうる「ついていけなさ」を看過しないよう注意が喚起されるべきである。

本論文のマイノリティ論、社会集団論一般に対するインプリケーションは以下のとおりである。第一に、社会集団とその「外部」の関係性について、差別論的構図に巻き込まれず、社会集団がその「外部」を活用し、自らの集合性を存立させるメカニズムを記述することの重要性を指摘した。第二に、ある社会集団が集団固有の文化的特徴を希薄化させることで安定的に存立する事態を描出していくことの意義を指摘した。

補論では、筆者を含むアカデミズム内の人間にとってもっともなじみ深い教育の現場に本論文の論じてきた「ついていけなさ」の回避の技法を軟着陸させ、同時にゲイ男性以外のセクシュアルマイノリティをめぐる状況に、本論文の議論を拡大するために、（高等）教育の現場における招き入れとしてクィア・ペダゴジーの実践について論じた。授業実践に基づき考察した結果、知っている／知らないという事態をめぐって繰り広げられる応酬は、「ついていけなさ」を感じさせる権力への抵抗として現れたものと解釈できる。したがって、クィア・ペダゴジーとは、このような抵抗の含意を十分に汲み上げる形で技法として鍛え上げられる必要があると考えられる。